



### 復興よりも構築

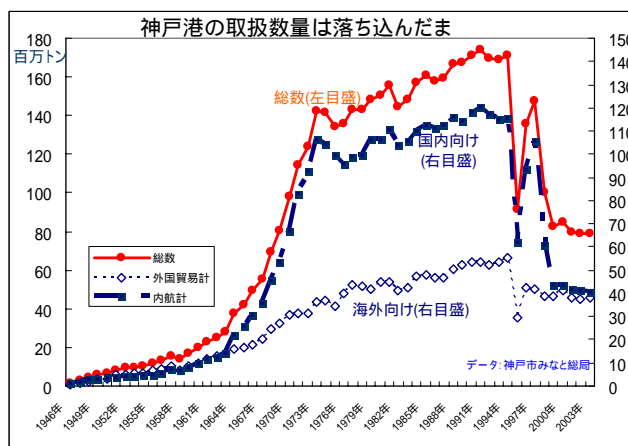
迎える1年がそれまでの1年よりも、より良いものでありたいと思うのは普通の心理だ。その1年の始まりである今月17日は、阪神・淡路大震災から10年目に当る。この10年を生きた人になればそれは激動の期間だった。大企業のいくつかは消滅し、多くの会社はその名を消した。より良い年とは、この過程で生じた枠組みの変化を生かすことだ。とすれば、新たな年は、配り直された札を組み替えることから始まる節目になる。

節目ということ言えば、2005年は昭和80年で終戦60年に当る。私たちは還暦を迎える長さを生きる間に、戦後復興と大不況も経験した。とりわけ、この10年の変化が激しかったので、懐古的発想を持つ人には、理解しがたいことが一層増えるかも知れない。

その一つは、中国経済の重さだろう。20年前、神戸港貿易額に占めるアジア比率は37%にしか過ぎなかったが、今では56%を占める最大のパートナーとなっている。20年前、世界第4位のコンテナ港だったが、いまでは20位にも入らない。それでも、スーパー中樞港として、阪神港の一翼を担うことになる。その役割の中で、中国貿易が急速に膨らんできている。新たな年は、中国の動向が地域経済としては見落とせない存在になってくる。経済成長の持続性や通貨切り上げ問題が、その中身となるだろう。そんな新しい年の始まりに、期待を抱くかどうかは時代の枠組み変化をどう受け容れるに拠る。そんな節目の一月目が始まる。

### 取扱量が回復していない神戸

戦後の神戸港は、目覚ましい勢いでその取扱高を拡大してきた。取扱高のピークは1991年の1億7,410万トンだった。1946年の取扱高は162万トンだったので、この間に

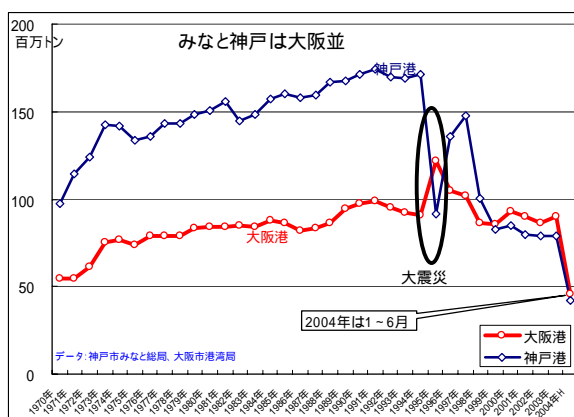


107倍にも拡大した。  
その頂点から見れば、昨年の実績は7,800万トンで45%水準。震災で減少した取扱高は、回復していない。

減少した内訳を見ると、大きく減少したのは国内貨物の取扱量だ。このピークは1991年の1億2,037万トン。昨年実績は4,065万トンだった。国内事業者は、神戸から他港へシフトしたままだ。輸出依存度が高い神戸にとっては、海外貿易港としての地位を、いかに確保して行くかが、地元経済にとっても重要な課題となっている。

### 大阪並になってしまった神戸。だが、輸出拠点としては重要

神戸港の取扱高数量は震災が起きた1995年、一時的に大阪港へシフトした。この



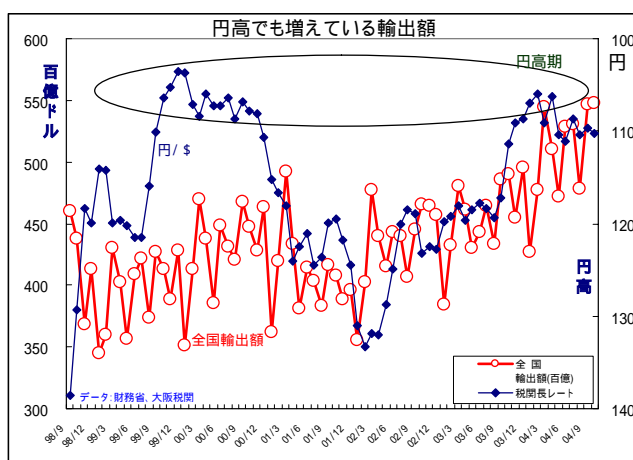
年に大阪港は、取扱数量で神戸港を抜いた。その後大阪港を上回る水準に回復したものの、ここ数年は大阪港と、殆ど変わらない程度の取扱量しか処理していない。

大阪港と神戸港は、輸入の大阪、輸出の神戸と特徴づけることができる。この両港を併せれば、阪神間の

貿易港として全国貿易の2割弱を担っている。取扱数量が減少したとは言え、重要拠点であることに変わりはない。スーパー中枢港湾としての阪神港だ。

### 円高は輸出に影響するだろうか

海外依存度を問題にする場合に懸念されるのは、12月になってから急速に進んだ円高への動きだ。これは、短期の変動もさることながら、長期的な傾向が及ぼす影響が、



より重要だ。一般に、円高は輸出を減速させる。

ただ、わが国全体で見た場合円高期にも、輸出金額は増加してきた。実際の動きを見る限り為替変動は、貿易額の総額に影響を及ぼしてはいない。為替変動に関わりなく、金額ベースでは増加してきている。この輸出

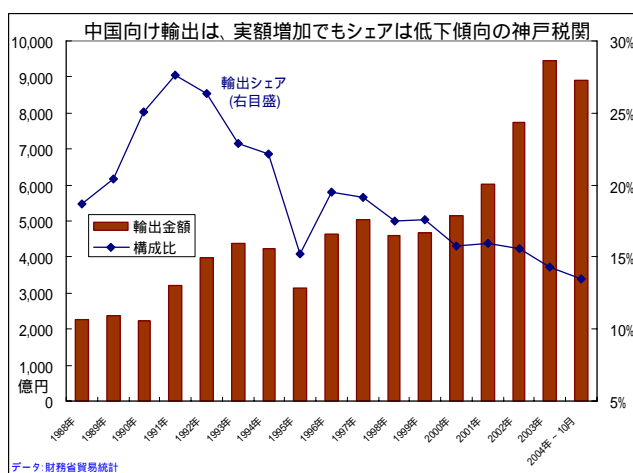
増加を支えているのは、アジアとの交易拡大だ。

### 神戸の地位低下は続いている

アジアとの交易依存度が高いのは日本全体の傾向だが、これは神戸も同じだ。取り分け、中国向けは昨年で28%(重量ベース)を占めて最大だった。

実際、神戸税関を通して輸出される金額ベースでの実額は、震災が起きた1995年こそ大きく落ち込んだものの、その後は一貫して増加を見せている。この点だけを見れば、神戸港の復興と復権は順調だといえる。

だが、全国シェアで比較した場合は様相が異なる。輸出総額に占める実額シェアで

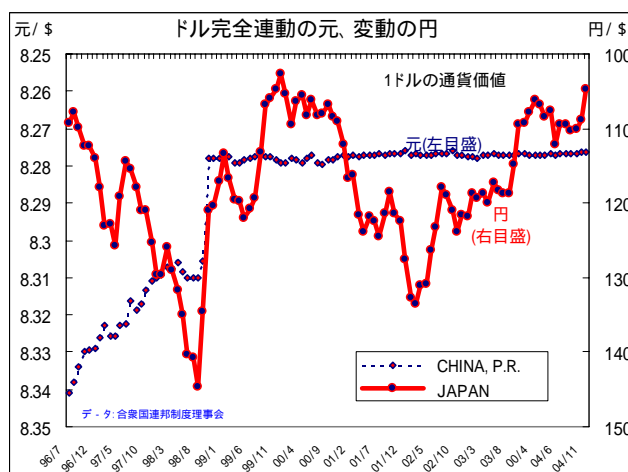


は、低下が続いているからだ。実額が増加しているのは、アジア貿易全体が底上げされ、なかでも中国向けの「特需」が大きく含まれているからに過ぎない。その特需も、神戸だけのものではないので、シェアは低下する結果を生んでいる。神戸にしか出来ないもの、がなければ本当に強い、安定した復権にはなりにくい。

は、低下が続いているからだ。実額が増加しているのは、アジア貿易全体が底上げされ、なかでも中国向けの「特需」が大きく含まれているからに過ぎない。その特需も、神戸だけのものではないので、シェアは低下する結果を生んでいる。神戸にしか出来ないもの、がなければ

### 円高でも輸出が減らないのは

為替が円高の方向に動いていても我が国の輸出額が増加しているのは、交易相手が



アジアであるからだと考えられる。中国が、日本から輸入した加工品や部品を、完成品に仕上げ再輸出する構造を考えれば分かりやすい。円高は中国からすれば原料安に繋がる。このため、中国から見れば為替から来る輸入促進効果がある。他方で、中国の通貨はドルと連動するように固定されているので、輸出への影響はない。全体としてみれば、円高傾斜は、生産基地である中国の国際競争力強化に繋がる。円高傾向は我が国にとって、対アジア輸出の増加という形で所得増加をもたらせている。

アジアであるからだと考えられる。中国が、日本から輸入した加工品や部品を、完成品に仕上げ再輸出する構造を考えれば分かりやすい。円高は中国からすれば原料安に繋がる。このため、中国から見れば為替から来る輸入促進効果がある。

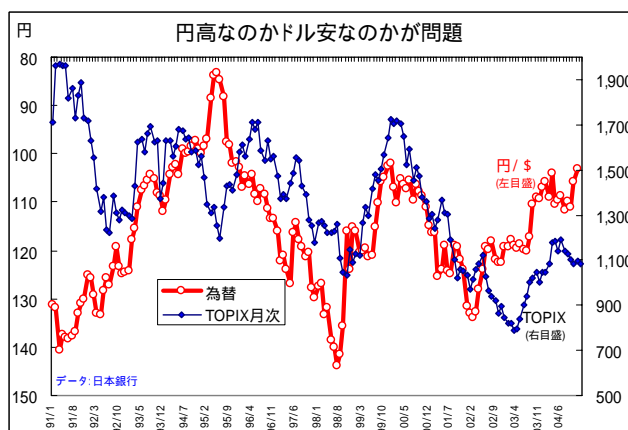
### ドル安でなければ、景況感への影響は小さい

景気感のある部分は、株価水準で表現される。円高が、景気に悪影響を及ぼすかも知れないと考えるならば、円高なのかドル安なのかも検討する必要がある。

90年以降の為替水準とTP0IXの動きを見たのが次ページのグラフ。ここに示す通り、円高に向かう過程では一般に株価も上昇してきた。詰まり、景気感は上向いていた。ある水準を越えた円高期を除いてはそうだったといえる。

2005年への懸念の一つは、同じ事が生起しないだろうかという点だろう。ブッシュ

政権は二期目の柱に年金改革を掲げている。中身は「個人勘定」の新設だ。年金は現役

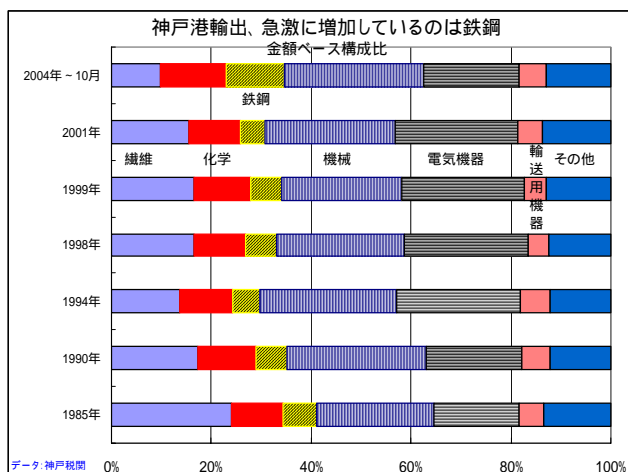


世代の拠出を退役世代への給付として払い出す制度。この拠出の一部を「個人勘定」へ積み立てて株式市場での運用などを認めようとするのが具体策だ。この場合、拠出の減少分を財政で穴埋めすることになるので、財政赤字が拡大する。これは、ドル

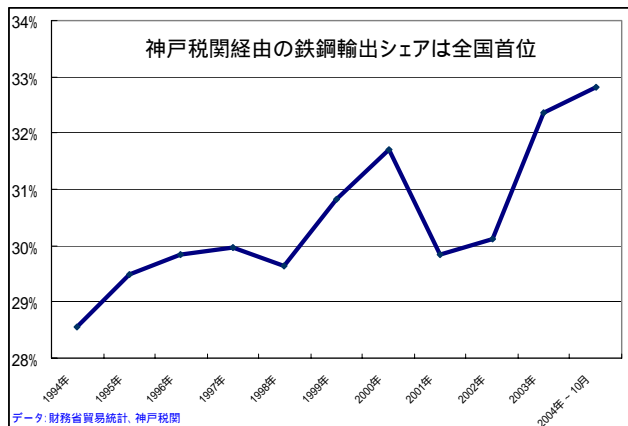
安要因だというのが、最近の市場への一つの解釈だろう。だとすれば、大統領選挙後に生じてきた為替変動は、円高というよりもドル安の動きだったとすることができる。

収明に

神戸港からのアジア向け輸出品目構成は、20年前には金額シェアで首位の座にあった織物用糸・繊維製品などの繊維製品が、今では10%台を割った。代って機械が3割



に迫ろうとする勢いを見せている。2003年から2004年にかけては鉄鋼・金属製品が急速に増加してきた。



これは、神戸港に限った場合だ。中国・四国を含む瀬戸内海全域を含む、神戸税関全体で見た場合は自動車、船舶、鉄鋼の輸出が上位に入ってきて、見える風景は大きく変わる。特に、鉄鋼輸出は1995年以降、10年連続のトップシェア(金額ベース)となる見込みだ。

だけの復興復権の問題ではなく、広域な地域経済の問題でもある。 (神保)

神戸にとっては中国の動向から目を離せない時代が始まっている。しかしこれは、特定の街

本資料は、参考情報の提供を目的としたものです。いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。記載内容は、12月17日までに公表された資料に基づいて作成していますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。主張や結論は、作成時点での執筆者の判断によるもので、資料発行/配布機関の公式見解を表明するものではありません。見解は、その後の状況に応じて予告なく変更されます。

より詳細なデータ、記載内容に対するお問い合わせは、池田銀行東京事務所 03-3284-1253 / 神保 敬明、もしくは jimbow@ikedabank.co.jp までお願いします。